www.b00k.gr

www.b00k.gr

（本文外の文章）

―印刷されるページは書籍の様式ではありません。

―ページ数はＰＤＦ形式のファイルのみ追加されています。

―文章およびデザインは読者のためだけのものであり他に使用されません。

www.b00k.gr

私に触れて…

www.b00k.gr

www.b00k.gr

あらゆる本の中で
最も小さい本の…

www.b00k.gr

たった二人の恋人がと言うには…
ゆっくりと道の端を歩いていた。軽く寄り添い、優しく語り合っていた…
たかが二人の恋人が、雲の濃くなりゆくなか、風が強まる中、枯れた落ち葉がその傍に寄せ集まるなかを、歩いていたのではなかった。二人の恋人が雨の降る中を歩いていた。
けれど雨は二人に触れることはない…　雨の滴は決して二人の恋人に触れることはなかった…

二人はゆっくりと、道に木々が交わって消えるような行き止まりに向かって歩いていた。そして秋は二人の周りに乾いた枝を咲かせていた。
道が交わりつつある処を進んでいた――覚えている――海へと。そこを歩いていた、湿った砂を、泡立つ波の方へゆっくりと歩いていた。
その時波は停まり彼らに言った:
「私に触れて…」

二つの手は一つのように動いた。

…今静かな海の上を歩んでいた。青く無色の海、流動的

www.b00k.gr

で同時に不動の。空は彼らを見て、彼らを愛した。太陽は彼らを見て嫉妬した。
　それから彼らに言った、
「私に触れて」

　二つの唇は一つのように動いた…

　そして太陽は降りそして彼らの隣に佇んだ…　その時空は薔薇の花弁のように赤くなった。その時海は炎のように赤くなり、血のように赤くなった。
　そして大地は血を、海を満たしていたそれ、かつて宇宙をそれから産んだ血を、滴らせ始めた。そして眠っていた月の上に落ち目を覚まさせた。

　それは、まだ赤く、真っ赤に、彼らの傍に来た…血のような海で踊っていた二人の恋人の傍へ来た。
　甘くお互いを抱き合い、優しく語り合っていたところの。

　太陽は月を見て怖くなった…　それを敬った。穏やかに水の縁に転がりそして空(くう)へ落ち、無限へ消えた…

　彼らだけが留まっていた。暗い海のその世界の端を歩いていた二人の恋人、夜の影を纏う海の。
　二人の恋人は彼らの傍に星が落ちていく間、風が強まっていく間、月がおどおどとその果てしない色に光を滴らせている間。
　闇が落ちてゆく間、風が強まりつつあり星が宇宙の端に集まっている間進んでいた。

　…けれどその時闇は決して彼らに触れることが出来ずにいただろう。けれど一体どの闇が二人の恋人に触れることが出来ただろうか？

　そして彼女は彼に言った：
「私に触れて…」

１２月１５日

www.b00k.gr

たった二輪の花と言うには。
二輪の花が森の傍らにひっそりと咲いていた。冬の盛りががそれを包んだ。
たった二輪の花と言うには、しっかりと森の傍らに根を張っていた。

覚えている、毎朝同じ日の光を浴びて。同じ風が吹き付けて目覚めさせた。そんなにも近く。
お互いの香が匂うほどに。
そんなにも遠く。二輪の花が決して存在しないほどに。
しかしそれでも森の生き物たちだったら隣同士だったと言っただろう。

そして彼に言った：「私に触れて」

彼は葉を広げてみた。風が吹くたびに、彼女の方へ、その体を伸ばした。花びらを広げようと、その繊維と心臓の部分にある小さな黒い一握りを伸ばそうとしてみた。
そして彼女はその身体を屈めた。その葉を広げて——風

が吹いている間震えていた葉…

* *

…それから彼らはその根を広げてみようと、それらを分かとうとする土にゆっくり転がそうとした。動く度に痛みを感じた。けれど気にしなかった。二輪の花だけが風に花弁を、土にその根を広げていた…
その中心を広げていた二輪の花——小さな一掴みの炭(すみ)たった二つ分の——彼らの周りには、冬が訪れようとしていた。

…

「出来ない」彼女に言って、そして彼の両目の端に一滴の露が現れた。
「出来ない」彼女に言って彼の花弁は閉じ、その葉は茎の周りに寄り添いそして根はおどおどとそれを縛っている土に縮こまった。

…巨大な木々と大きな灰色の岩々と冬の間を堪えきれず流れる川の隣に、そんな小さな二つの花があった…

その時彼に言った：「私に触れて…」

…そして一枚の青い花弁が風に流れた。閉じた花弁の上に落ちて——花弁は開いた。寄り添った葉の上弱

www.b00k.gr

った茎の上を転がった。予期せず開いた葉の上を。そして土の、それを捕えんと起きようとした疲れた根の上を。
…けれど風が既にそれをさらっていた。
けれど気ままに森の端を――そしてそれも――流れる川に既に落ちていた。

…そして風がたまたま向きを変えている間、花弁がそれと一緒に旅するのを見ることが出来ただろう。弱った二本の茎に寄りかかる葉に少しの間留まり、厳しい冬の世に愚かにも土から露出した根に留まり、そんな厳しい冬、たった二輪の花には。

花弁がその中心部分から離れるのを見ることが出来ただろう、もっと向こうに立つ別の中心に少しの間寄り添ってから。少しの間もっとむこうの広げると葉が届く処から、土に伸ばすと根が届く処から。そんなにも遠く…
しかしそれでも森の生き物たちだったら隣同士だったと言っただろう。

＊ ＊

季節は去り別のが訪れた。たった季節だけでと言うには。
そしてたった二輪の花と言うには。森の端で咲いて枯れてゆく二輪の花。世界の端で咲いていつも枯れてゆく二輪の花。

そして覚えている、いつも花弁のない二つの花。何故ならそれらの花弁は、色彩に満ちるや、向かい合う花に旅立つから。覚えている、いつも森の端で裸の二輪の花。
中心だけが――小さな一掴みの炭（すみ）たった二つ分の――二輪の花。

…そして今日もまだ、冬の最中そこを通れば、恐らく一輪がもう一輪に囁くのを聞くだろう:

「私に触れて」

１２月１６日

www.b00k.gr

太陽は昇る一方で銀の硬貨の上に輝いていた。
そしてそれは長い時間の深い眠りの後　徐に目を開け痺れた体を伸ばした。その上ではたいへん湿気があった！村のはずれの二階建ての農家の屋根瓦の上。

「おはよう」、優しく片側に言った。

返答なし。

「おはよう！
起きて、夜が明けた…」もう一度言った、もっと優しく。

けれどその片側は答えなかった。今日も答えなかった。
記憶する限り答えたことはなかった。どれだけ優しく話しかけたとしても、何度も求めたとしても。

空に昇る太陽を見つめて微笑んだ。

「どうして私に話してくれないの？」また片側に言った。
「私に話して、私もあなたと同じぐらいこんなにも独りなの。」
「私に話して。」

「知ってる、私に付き合うのが嫌(いや)かも知れない、だけど何が出来るって？私たちは一枚の硬貨の二つの面に過ぎない。そして時々お話しするのもいいことよ。
お互いそれぞれがいるのもいいことじゃなくて？」

しかしもう一面は話さなかった。幾たびも彼女に乞いた。知っている限りの方法で彼女に乞いた。しかしそんなに多くは知らなかった！一枚の小さな安い硬貨の一つの側だった。それ以上のものではなかった。

「おやすみなさい」闇が降りる中、そう言った…

* *

「おはよう」太陽が微笑むや甘く言った。

返答なし。けれど多分まだ眠っているのだ！もう少し待とう。

太陽が高く昇るまで待った。金色の一つの太陽。あの農家の瓦屋根の上、銀色の硬貨の上に輝く一つの太陽。その時思い切ってまた話しかけようとした。
「今日もいい一日ね、そうじゃなくて？」

www.b00k.gr

しかし答えなかった。今日まで答えたことがなかったように。
何故？
もう片面の興味を引かなかった？
ひょっとすると話さない理由があったのかも？ひょっとすると誰かがもう一面のことを知るのはよくなかった？

彼女にはそんなに悪くは思えなかった…
その一方で実際に何を知り得たのか？一枚の小さな安い硬貨の一つの側だった。

…

ひょっとして…

けれどそうだ！今まで何故考え付かなかったのだろう？それだ！それ以外にありえなかった。それ、そんなに簡単！

「ひょっとして話せないの？」彼女に言った。
「ひょっとして話したいけれどできないの?」

「それなら何かして、瓦を叩いてくれれば判る。」
「もし話せないなら、瓦を叩いて！」

何も起きなかった。
動きも、音も。それでも一瞬信じた…

ほんの一瞬だけやっともう片側と話し合えると信じた。草の生えた瓦を叩くことで多分。
微かな動きで意見や、考えや、感情を交換しただろう。話すための新しい方法を見つけたでしょう。
話すために！

村のはずれの一軒の屋根に、一枚の硬貨の二つの面。二つの面、ふたりきり。

何も起きなかった。
動きも。音も。答えは単純だった。彼女に話しかけたくなかった。

「よい夜を」そう言って、西に向かう太陽を見つめるために留まった。どうしようもなく泣きたかったがそうしまいとした。恐らくもう片方の側に気付かれただろう。
恐らく微妙な動きで、漏らすすすり泣きで気付かれただろう。

いいえ、泣くことはできなかった！恐らくもう片方の側に気付かれただろう。そして何が何でも悲しませたくなかった。
彼女もまた孤独な一つの側、ひとりぼっち。恐らく彼女よりもずっと独り。

けれどそれならどうして彼女に話そうとしない？何故？
小さな村のはずれにある屋根の上、二人とも、孤独な二つの面、ふたりきりなのに。

www.b00k.gr

* *

その朝はおはようを言わなかった。

夜通し引っ掛かっていたある問いから始めた。それは世界の村という村のどの硬貨、どの面も、これほど彼女を苛みはしないものだった。

「ひょっとしてと私を憎んでる」と言って、震えを、目尻の涙をどうにかこらえた。

「ひょっとして私を憎んでる　だって村と太陽は見えるもの？」「ひょっとして私を憎んでる　だってあなたは瓦の方を向いているから？」

「言って！言って、お願い…」

返答なし。

「だけど私のせいではない、知っているでしょう…覚えてるでしょう、そうじゃなくて？」
「あのいたずら小僧のせい、私たちをこの屋根に放った！」

「言って。覚えてるって言って…」

「…話して、お願い。私も一枚の小さな安い硬貨の一つの側なの。話して！あなたのことを話して！なんてもいいから言って！私はあなたのもう片面！」

それから絶望して自分の姿を描写し始めた。
多分ありきたりの外観だった。細かな特徴の一人の女性の肖像、美しい鼻と好感の持てる目。
何処かの二階建ての農家の屋根に永遠に囚われた一人の女性。

「あなたのことを言って」、そう言った。
「何に似ているのか言って！」

「友達になれるわ！あなたが望めば親友になれる！全ての硬貨の、全ての面から一番の親友。
あらゆる村で一番の親友。全ての国の。もしひとことでも言ってくれれば、世界一の。
たった一言！
そうしたいって言ってくれれば！」

「そして私もあなたのためだけに存在する！そうしたら二度と話してくれなくてもいい…」

沈黙。全くの沈黙…　けれど何故？
彼女も孤独な一面、ひとりぼっち、恐らく世界中のども面よりも孤独…

...

あの日からそれ以降、見るもの全てを彼女に描写し

www.b00k.gr

始めた。
　彼女に話すことは求めなかった。もうそれ以上は。ただこれ以上求めることなく彼女に話していた。
　村やその隣の森について話していた。家々の真ん中を通る大きな通りや市場について話していた。太陽と雲について話していた。空の鳥について。日曜ごとに鳴った鐘々について。

　あの日以来その面の生活は以前と同じではなかった。見るもの全てを描写して、二度と何も求めなかった。

　もう片面について知る事を求めないのが果たして良いことなのか悪いことなのか判らなかった。しかし彼女の生活はあの日からずっと美しくなった。そして孤独さは減り、村のどの場所のどの片面よりも、ずっと少なく感じられた。

　孤独感の減った一面だった。

＊＊

　あの屋根の上で初めて、嵐に見舞われた。冬の最初の嵐。
　そして大きな粒が彼女に降りかかるとたいそう喜んだ。大切な片面を守っていたのだ！

　風はとても強まった。
　瓦が震え始めるほどに強まった。二階建ての農家の屋根の瓦はこれまでにないほど震えていた。

　そしてその時災いが起きた！

　世界のどの片隅のどの一面でも何が起きたか判らなかったほど、素早く…
　草の生えた屋根を転がるのだけを感じられた。

＊＊

　下ではとても、でもとてもじめじめしていた！
　村のはずれにある一つの小さな農家の庭の真ん中、下では。

　それでも一面はいっそう嬉しかった！けれど泥に漬かった一面だった。泥に漬かった、細かな特徴の一人の女性を持つ面。
　それでもとても嬉しかった！

　もう片面はまた雲を見ることが出来た。車や道を。鐘々や森を。
　もう片面を、太陽が照らした！

　そう、とても嬉しかった。村中のどんな硬貨のどんな面よりもずっと嬉しかった。

www.b00k.gr

そしてもう一面は間違いなく彼女に話すだろう。それまでは彼女に話すことのなかったもう一面。
間違いなく今から彼女に全てを物語るだろう。見るもの全てを。
山々や森。村や家々。太陽と雲…

彼女自身が聞くことは出来なくとも。彼女自身が話しかけることが出来なくとも。今や泥に漬かった一面であったとしても。

それでも少しだけふたりぼっちでなくなった二つの面だった。農家のある小さな村で、他のどの面よりも少しだけふたりぼっちでなくなった。

そしてその時災いが起きた！

世界のどの場所にあるどの面も何が起きたのかわからぬほど素早く。
しかし残念ながら彼女は間に合った…　残念ながら全てを知るのに間に合ってしまった…

＊＊

…湿気はもはや全く無かった。

ある収集家の所蔵品の目立つ位置の、曇り一つなく綺麗な一面だった。　そして、しかし本当に、所蔵品の中でも特殊な、不思議な一つだった。

珍しく希少価値な一枚の硬貨だった。
事実類のない一つの硬貨だった！
今までどんな収集家も見つけたことのない一つ枚硬貨だった！

沢山の所蔵品の真ん中のガラスの箱にあったあの一枚の硬貨――どうやってとか何故とか訊かないで欲しい――片面だけの一枚の硬貨！

そうです、お聞きになった通りです！
片面だけの一枚の硬貨。

…ずっとひとりぼっちな一面、
他のどんな面よりも、他のどの硬貨よりも、
世界の他のどんな場所のものよりも。

１２月１７日から１８日にかけて

www.b00k.gr

「少々髪を繕って…

繊細な生地の帯を結ぶ…
波打つのを抑えられるよう右の肩パッドを起こす… そして最後に赤い絹の肩掛けを通し、腰を抱いてその両肘に至るように…

完璧！

動作に少し強調を付け足して…

右の足に歩調を強める「何か」一つ、そして左腕は少し軽くもっと伸ばして。

素敵！出来たと思う！」

…

安堵。彼女には全ての手順が決して好きではなかった。目を開く時間だった…

赤！ 彼女のお気に入りの色！

そして実に美しいドレスだった！

それでも、白い肩掛けをむしろ好んだ…

＊＊

「ガラスから紙を取る時間…」
紙の帯を剥がし、彼らの後ろの世界を部分部分露わにしていった。

彼女のお気に入りの光景だった！一番人通りの多い道。車、二輪車、バス、通行人… 大勢の通行人… 色とりどりの服の人形、詰め込み過ぎたプラスチックの袋を抱えて歩いている… 疑わしい感覚の、疑わしい質の服を着て。

そして彼女も彼らの間、彼らの隣に！彼女を見つめそして羨まない筈が無い。
完璧なプロポーションの、高額な、赤い絹のドレスを着た女性！炎のように、赤い肩掛けを女らしさに満ちた動作で肘に落ちるままにした一人の女性…

ショーウィンドウの真ん中に一人の女性！

そう、存在した――告白しなければならない――他の女性たちがそのショーウィンドウに。それでも彼女は何かそれ以上のものを持っていたに違いない。

www.b00k.gr

他に説明の仕様がない。他の大勢の中、一人の女性が選ばれる、真ん中でポーズを取るために。いつも最良のドレスを着る一人の女性。一番高価な服。最新の流行の選択。
そう、事実完璧さに注意を払われた一人の女性。
彼女の動作の一つ一つは多くの試行と考えの産物。彼女の髪型の一つ一つは話し合いの結果。彼女の何一つ偶然ではない。何一つ思いつきからではない。
彼女の周りに広げられていた装飾、ドレス、照明ですら…　全てが彼女を基準に調整されていた！

彼女！
店舗で一番大きいガラス窓に、永遠の女性を権化した一人の女性。
ショーウィンドウの人形たちを見つめるよう置かれた。お構いなしに、身嗜みもなく、彼女の前を急いで通り過ぎる人形たち。しかし道を移動するマネキンたちに誰が何を期待する？

そしてもし何かが彼女らに価値を与えるとしたら、ある価値の印、それはいつも結局立ち止まって見つめること…
どれだけ急いでいても、どれだけ間に合おうと走っていても…

いつも奇妙な仕方で一人の本物の女性を見る時間があった！
現在赤い正絹のドレスを着て肩掛けを無関心に両肘へ掛けた一人の女性。窓の後の一人の女性。

本日の評価基準、夜を煌々と照らして。

窓の真ん中の女性！

＊＊

それでも、その女性ですら――永遠の女性の模範――一つの小さな問題が、覚えている、あった…
そのような女性にとは奇妙だとあなた方は言うだろう！道の人形たちが見つめるために作られた一人の女性に。

しかしそれでも一つの些細な問題があった…

外観を変えなければならない時、とても気まずく感じていた。確かに違う色やデザインの、次のを彼女に着せるため、前の服を脱ぐ時。
そう、この女性は裸で立っている時そんなにも恥ずかしく感じていた！

勿論店の店員たちはショーウィンドウの人々が彼女を眺めないよう出来るだけのことをした。
ショーウィンドウの人々が裸の彼女を見るのはそんなにも気まずかっただろう！酷い！悲惨！最新の流行の選択をいつも着た、窓の真ん中でポーズを取るために他の誰をも差し置いて作られた一人の女性には理解不可能な！

www.b00k.gr

店員たちは本当に出来るだけのことをした。
道のマネキンたちが生きるショーウィンドウを大きな紙の帯で毎回覆った。一つも隙間がないよう念入りに世話した。
彼女の後ろ側については――店の内側の方――適当な色の大きな布で絶えず覆われていた。彼女の服に、彼女の髪の色に、季節の照明に合う色で…

全てが彼女に関連していた。全てが彼女の周りを回っていた！

永遠の女性の権現！

…しかしそれでも良い気分ではなかった。
通行人が彼女を見ていなくても、ある瞬間、ほんの僅かでも、裸でいると彼女は知っていた！そしてとても無頓着な裸。そんなにも――口にするのが怖いが――醜い。

どれだけ関節の隙間がはっきり現れていただろう！彼女にそれぞれの動きを与えていた部分！どれだけ奇妙に晒されていただろう…　どれだけ露わに…

いいや！彼女自身すらその光景に耐えられなかった。服を替える時はいつも目を閉じていた。彼女にはそんなにも――とても口にするのが怖い――偽物に思えた！しかしそれでもよく知っていた――何よりもよく――世界で最も本物の女性であると…

常に窓の中心の女性であるだろうと。ショーウィンドウの全ての女性が間違いなく羨む一人の女性。永遠のモデルとなるひとりの女性の前を、永遠の通行人となる人形たち…

…時折本当に彼女らを哀れんだ…

* *

今日は黒いベルベットの素晴らしい長いドレスを着ていた。

ぴったりした、首元が閉じた、くるぶしの少し下丈の細く長い粋な袖。二列に、帯のように、腰の高さまでラインストーンが飾られた。
悪くないと言えた、たとえ黒は一番良いとみなさなくとも。いつも彼女には赤が何より似合っていた。
それでもまさにそのドレスは明らかに彼女の身体の線を引き立てていた…

彼女はついと目を上げた。

紙テープが除かれショーウィンドウの人形たちが徐々に姿を現す、最初の瞬間から解った。
時々ショーウィンドウの人形たちも彼女を不思議に思っていた。急いでいる時ですら、いつも立ち止まり彼女に見惚れた。似合わなかろ うと、いつも彼女の着

www.b00k.gr

ている服を買った。言う事が沢山あろうと、いつも最後は彼女の話で締めくくられた。

しかし違いすぎた！彼女達が自分の立場にあることをどのように想像していたか、彼女はよく疑問に思っていた…
彼女は立っていた。彼女たちは通りすがっていた。
彼女は売っていた。彼女たちはただ買っていた。

彼女たちは彼女に見惚れて、彼女は彼女たちを眺めていた！
彼女は女、そして彼女らはショーウィンドウの人形に過ぎなかった！

真ん中、そして世界の隅で彷徨っていた…

可哀想な人形たち！
幸いにも彼女の世界には属さなかった！幸いにも決して彼女の世界には属せなかった…

幸いにも誰かがあのガラスを張ろうと考えたことで…

…

奇妙なガラス、本当に。
透明で、しかしそれでもその後の違う世界を隠していた。二つの完全に異質な世界を分けていた。それでいい！そのガラスがなかったことを考えてごらん。
破滅！たまたま通りかかる者が彼女を近くで見ることが出来ただろう。彼女をまじまじと見て、彼女を調べて——口にするのも恥ずかしいが——彼女に触れた

だろう！彼女の二つ目の最大の悪夢！
いいや、そのガラスを入れた者は何かを知っていた。モデル女性をしっかり守っていた。彼女のような一人の女性、いつも高価なドレスを着て、流行の選択から最新を追うのに相応しい、相応しい——いいではないか？——それを導くのさえ。
異なって作られた一人の女性。道を絶えず這う人形たちとは違う。他の間を動くのとは。群集にいつも紛れて生きる人形たち。哀れな人形たち！

そう、ガラスを入れた者は何かを知っていた！

彼女に触れることを？考えることも望まなかっただろう。

* *

もう一度！もう一度目を閉じて、しっかりと。
そしてもしある瞬間ショーウィンドウの何処かの部分が覆われず忘れられてないか確かめようと薄目を開けたら。
勿論彼女らには絶対の信頼があった。
彼女自身が自分の世話をしていたよりずっとよく気を付けただろうと知っていた。

常にマネキンたちのショーウィンドウを覆っただろう。
常に彼女に最高のドレスを着せただろう。

www.b00k.gr

彼女の髪を注意して整えただろう。
窓の真ん中の女性の美しさを際立たせるよう、彼女を照らしただろう。

そう、彼女らの手には絶対的な信頼があった。恐らく彼女の親友だろう。

…それでも、裸であると云う感覚だけでも彼女をうろたえさせた！
必然的に考えても裸であってはならなかっただろう。世界で一番大きなワードローブをを持っていた！
千の帽子にドレス、彼女だけのために。彼女を際立たせるための、披露するための、象徴とするための千の色彩やデザイン。

全てが彼女のために！全てがその女性のために！世界で最も本物の女性。永遠の女性！
最も本物、疑いの余地もなく、道で動く全てのマネキンたちよりも。

彼女は目を開けた…

また一着の美しいドレス。
ゆったりした――時にはもっと質素なものを着るべきだと言っていた――腰の右側に奇妙な待ち針が一本、どんな一本の帯とも同等の価値の代わりをして、同時に特別な技巧を与えながら。

「動作に自由の感覚を…
ショーウィンドウの端に無関心な視線を向けて…
完璧！

その手が今…
閉じた？いいえ、待ち針を隠そうと…
ひょっとすると背中を向けて？

でもとても綺麗な手をしている！

彼女の前にその時、殆ど伸ばして、軽く傾いだ胴体に平行した動きで…

そう、それでいい…」

「とても素敵！紙の帯を外す時…」

* *

その日は――覚えている――美しく始まった。他の日々と同じように美しく。
日の光降り注ぐ春の朝だった。

目をまた引いた。
直ぐに目を引いた。

どの色を着ようと、この場合紫、どの動作をしようと、いつも彼女を見つめていた、彼女を賞賛していた。

www.b00k.gr

窓の真ん中に、完璧なプロポーションにデザインされた、歳を取らない一人の女性。世界の中心に一人の女性！

彼女を賞賛するために、そして――そうではないのか？――彼女に嫉妬するために。
彼女を模倣するために、彼女に到達することは決して出来ないまま。

彼女を切望するために、彼女に触れることはは決して出来ないまま。

今ゆったりとした春のドレスを着た一人の女性、腰の右側には奇妙な待ち針を一本付けて…

…

…何処から火事が起きたか誰も分からなかった、あの日…

他の日々と似たある一日。
太陽が色彩を満たしたある一日…

彼女の背後で混乱、叫び声、動転。走る人々…
彼女の窓から逃げて行くのを見ることが出来た。

彼女の友人たちは彼女の高価な衣類と共に金属の支えを引っ張っていた。

そう、彼女らを信頼していた！いつも彼女らを信頼していた。彼女らの仕事をよく知っていた。しかし必然的に彼女を最初に出すべきではなかったのか？
気にしない。まだ時間はある…

残されたカーテンやドレスは炎に包まれた。紙のポスターを台無しにしながら、店の置くの壁を舐めていた。
彼女らを今か今かと待ち受けていた。彼女の友人たちは結局は彼女を思い出しただろう。疑いはなかった。

ショーウィンドウの人々は遠くに集められていた、ガラスからとても遠くに！かつてはそれに触れていた人々。よく確かめようとその近くに屈んでいた。
彼らがもはや佇み彼女の方を見つめているのを見ていた。通行人はなかった。皆が佇んでいた。彼女の窓を見つめて皆が立ち止まっていた。
その時もまだ…
真ん中に女性がいる今もまだ。

…

やっと！

彼女らが彼女の方に走って来るのを見た…
彼女らが店に入ってくるのを感じた。彼女の後ろの布を力込めて引くのを。素早く動く手を…　横の壁に

www.b00k.gr

取り付けられた服を引っ張っているのを。床に放置されたドレスを運び出しているのを…

彼女の腰の端にある大きな待ち針を外す手…
徐に春のドレスを取り除く一方で、真ん中の一人の女性の身体の部分が床に落ちるのを。

彼女らが走り去って行くのを一人の女性が黙って見ていた。
ショーウィンドウの後ろで無関心に、彼女らが見守る群衆に急いで加わるのを見ていた、無言で観察していた…

一人の女性の身体の部分が裸で、迫りつつある炎に照らされた窓の真ん中に捨てられて…
もはや目を閉じることの出来ないであろう一人の女性が裸で…
もはやガラスを覆うことすら出来ないであろう…

一人の女性がひとり見守る群衆に視線を向けていた、裸で、真ん中に捨てられた、一人の裸の女性を無関心に見守る群衆。

…

今日までそんな力を見つけられるとは理解したことがなかった。

それでもしかしあの女性は――恐らく世界でもっとも本物の女性は――その視線をショーウインドウのマネキンたちから遠くに向ける力を見つけた…

一人の孤独な女性。
一人の裸、とても裸で、あの日の光降り注ぐ春の朝、世界の真ん中で。

ばらばらになったひとりの女性、目を開けて、見開いて、彼女を溶かす炎に放置されるのを落ち着いて見守られている…

www.b00k.gr

＊＊

「少々髪を繕って…

繊細な生地の帯を結ぶ…
波打つのを抑えられるよう右の肩パッドを起こす… そして最後に赤い絹の肩掛けを通し、腰を抱いてその両肘に至るように…

完璧！

動作に少し強調を付け足して…
右の足に歩調を強める「何か」一つ、そして左腕は少し軽くもっと伸ばして。

素敵！出来たと思う！」

…

安堵。彼女には全ての手順が決して好きではなかった。目を開く時間だった…

緑！ 彼女のお気に入りの色！
そして実に美しいドレスだった！

それでも、
青い肩掛けをむしろ好んだ…

１２月２３日

そんな生き物が生まれたことはかつて一度もなかった。
かつて一度も。
どんな画家も決して描けなかったであろう程の美しさ！どんな作家も描写出来なかったであろう！あなた方には、残念ながら、決して言葉にして言えなかったであろう… 友よ、画像や表現を超える一つの姿。

そしてもし彼女を実際に独特のものにしている何かを選ばなければならないとしたら、彼女を無類とする何か、完璧さを提供する何か… それならばそれは彼女の唇だったろう！
想像そのものすら超える二枚の唇…

世界の中心の二枚の唇！

…

かつて味わったことを覚えている二枚の唇、しばし自分のに触れていた… そしてそれらの秘密を信頼していた自分のに。

www.b00k.gr

* *

それらは触れた最初の瞬間に分かったけれどずっと後で告白した、その時自分は恐らく何も出来なかっただろう。しかし同じように何時も奇妙だった自分の唇…
しなければならない時、話すのにとても遅れていた！

それで物事を望む方へと導いて、自分が切り出すのを辛抱強く待っていた…
中程だった、おおよそ、ある午前の…

「話しておくれ、君らに何を言った？」それらに尋ねた。

それらは満足気に微笑んだ。
比較的軽い咳でそれらの喉をすっきりさせた後、暫くの沈黙を加えて不安を引き伸ばし、そしてやっとそれらに馴染みの謎で始めた：

「二つの唇が他に言ったことのないことを言った！」それらは答えた。

「つまり？」

「真実を言った！」

無力にも今夜話し合いは長くなると分かった…　今一度自分を悩ますつもりだと。更には、自分はそれら

にとってお気に入りの慰み物だった。
「でも…」、集中しようと努めた、「通常唇は真実を言わない？」

直ぐには答えなかった。
ただずるく微笑みそしてまた――自分にはどのようにか知らない、しかしそれらだけがやり遂げることが出来る微笑で。誰も知らない何かを隠しているかのように…
「通常私達に言うよう言われたことを言う…」、その時自分の上唇が囁いた！
「或いは聞きたいと望むことを！」、考えもなしにもう一つが付け加えた。

「奇妙だ…」自分は呟いた。

「何故奇妙だと？」どこか訝しげに、知りたがった。

「知らない…
そう聞こえる…」
（ここであなた方にお許し頂きたい自分の小さな、慌しい嘘も、しかしご存知のように真実は時々より多くの物事で複雑になる！そして全てが既にかなり入り組んでいるようだ…）

それからそれらに隠している事全てを分かち合うよう求めた。
躊躇した、けれどそれらも自分と同じ事を求めていると知っていた。しかし知り合った最初の日からそれらはそのように不機嫌だった…　一つのちっぽけな真実のために、誰でもそれらに数千回頼み、そして千も

www.b00k.gr

のことを約束しなければならなかった！

―あなたを信用していい？
―うん、決してそれを裏切ったりしない！

＊＊

予想していなかった一つの真実だった、本当に、どの口から聞くことも…　特に自分のもののような口から…

「座って」それらの小さな腰掛椅子を示しながら優しく自分に勧めて、その後自分のソファーに乗りだらしなく横になった。

座った、出来る仕方で。
自分を高いところから見つめつつ、それらは動揺することなく待っていた。そしてどちらも勿体ぶって無言。

「あなたがかつて愛した唇、実際にあなたを愛した事は決してなかった」、その時自分の下唇は前置きもなく言った。そんなにも素っ気なく！
「…あなたのことも、私たちのことも…」、何も重大なことを言っていないかのような冷淡さで、同様に徐にもう一つも付け足した。
そしてその後それらの枕を片付けようとした！

ここで、お許しを、しかしもう一度それらにとって特に大切なことを付け加えなければならない、何故なら正直なところそれらの態度の急変を決して誤解して欲しくはないから。唇が真実を言おうと決めた時、信じ難いほど乱暴でひねくれるかもしれないことをよく知って欲しい。
続けよう…

「でも自分には別のことを言った！」不平を言って真っ直ぐ立ち上がった。

「座って」、二つが同時に叫んだ。
従った。

「それらの唇は」、乾咳をしながらその後続けた、「誰も愛したことはなかった！どのみち誰も愛する事は出来ないでいた…
いつもその姿があなたに言いたいことを言っていただけ！」
「…そしてあなたはそんなにも長くて何も分からなかった」、哀れみも無く付け加えた。
「あなたの耳が聞きたがっていたことを聞いていた！」

「ごめんなさい。」
「…でもどうやってあり得た？」「何故？」

それらに馴染みのある沈黙へ戻った。
「哀しい、特殊な場合…」、結局答えた。
「ある日知り合ったあの唇は、だった…
　…悲しむ二つの唇だったと残念ながら思う。」

www.b00k.gr

＊＊

…ならない――今やはっきりと見えなければ――多分そのようなものを待たなければ。物事がそちらに導かれて行くだろうことを見ていたら…　真実に囚われている時通常全てが深刻に危険になる。とにかく。

「あり得ない！」受け入れまいと、ゆっくりと言った。
「最も美しい創造物の、最も美しい唇だった。
世界中で最も熱望される！無理だ…」

「悲しむ二つの唇だった」、疑いを受け入れない面持ちで自分を遮った。見たことがない面持ちだったと言おうか、勿論見慣れていなかった。

「…何故か知っている？」、同様の面持ちで尋ねた。
「私たちは分かった。」
「何だった？」

内密に、人間の唇から聞くとは予想しなかったことだった。
言うべきことを一気に言わんとするかのようにそれらは深く息を吸った。多分始める方法を探しながら、ためらった。そしてその後話した。躊躇しながら。
恐らく既にそれらの言葉がどのように聞こえるだろうかを知りつつ…

「それら自身が、かつて年老いた二つの唇があったと私たちに言った…」答えた。
そして一体となった。良心の呵責を感じたかのように。或いは他に言う事がもはや無かったかのように。その言い回しの記憶は、それでもしかしそれらの耳にまだ漂っているかのようだった。

居心地悪く自分が小さな腰掛椅子に座っている一方それらはゆっくり枕に沈んでいった。
「つまり？」驚いてみせた。
―誰にも理解するのは難しい…　辻褄が合わないのに似ている…　意味が無いかも知れない。
―自分を試してごらん。

「二つの年老いた唇…」落ち着いて続けた。
「二つの肉感的唇…　覚えてる？
最も美しい身体の上の、最も爽やかな身体の、二つの皺だらけの唇。非の打ち所のない身体の…
最も若々しい肌の…」

「それでどうした？」不思議に思った。「何処が悪い？」
「それだった、想像するに、全ての唇の中でも最も美しい。完璧な二つの唇、完璧な身体の上の。」

「あなたは分からない…」それらは言い張った。
「もう一度言う、二つの年老いた唇、世界で最も若々しい肌の上の…」
「そして外見、知っておきなさい、それらにとってとても大きな意味があった。」

…ここまであなた方が何を理解したかは知らない、いずれにせよ自分はその時まで多くを理解したとは言

www.b00k.gr

えなかっただろう…　そして自分の唇だった、状況の深刻さに関わらず、起き上がって絶え間なくそれらの小さな枕を上下に歩いていたのは。

「それでどうした？」
「…全ての唇は『年老いて』いない？」

それらはまたしても答えなかった。身動きもしなかった。他にも言う必要があるような今…　ただ黙った。
そして自分の唇が黙っている、覚えている限り、或いは考えているか考える時間を与えている時。
そのようにゆっくりゆっくり自分でそれ以上の何かを理解し始めた。誰が知るものか――真実かも知れない！それらに知り合った時からそんな長い間だけ…
恐らく常にただ二つの唇だけだった、それだけで、世界の中心で悲しんでいた。決して他の誰も知らないまま。
そして自分の目は、全てのもののように、かつて見たいものをただ見ていた。

「でも…　何故？」
「何故なんて無い」低い声で答えた。
「二つの醜い唇であったと、思っていた――恐らく全ての唇の中で最も醜い…」
「そしてそれらにとって外見はそれらにとって大きな意味があった」囁いた、それら自身だけと話しているかのように。

「…そうして望まなかった、ことによってはもはや誰も愛せなかった…
それら自身を…　あなたを…　わたし達を…」

「だからあなたには決して言わなかった…
何をあなたに言えた？」

何を自分に言ったか…　そして自分もどうやって理解することが出来ただろうか。そんなにも大ばか者であった。
「残念ながらあなたには何も出来ることがなかった…」

「…あなたが見ているこの唇、恐らくどれだけ奇妙に聞こえても、どれも存在しない」、続けた、「実際に感じることの出来ない。助けることの出来ない――少しでさえ！」

「誰か――言った、そして結局わずらわしい咳を止めた――決して触れることの出来る、或いは出来たであろう。」

＊＊

喋らなかった。何も言わなかった。全く何も！自分の唇がそんなにも曝け出すのは初めてであったとしても…　そんなにも言いたい事があったとしても、結局一言も発せなかった。

何日も、それでもしかし、考えていた…　昼も夜も。
論理的にはまだなにか起きる事があるべきだったろうと、今でも。或いはひょっとしてもはやとても遅くて自分自身を苛んでいただけ？

www.b00k.gr

さて、あなた方には知っていてとここで言う、唇が自分を苛立たせることがあると！総体的に！
言うことがあると言って、そしてその後幸せに眠っている！そして実際に何を言おうとしたのか再び疑問に思いながら、そして言ったことが本当だったのか！

…疑いなく知っていた唯一のことは、ある日愛したあの唇は自分にとってかつて自分が知ったうちで最も美しかった。恐らく今となっても実にまだより美しい…そしてその美しさの源が自分には本来分かっていなかったとしても！他の全てとは異なるものにした何か。
そしてそれら自身が美しい唇などないと信じていたとしても、全てが年老いていたとしても、そして…自分は見当がつかない！
けれど果たして何が出来ただろう？何か出来ただろうか？
何処か――それを感じた――何か間違いが起きたに違いないだろう。けれど何処で？
そしてどれに？

自分たちではその美しさを見ずにいたのだから、それら自身の美しさを！
そしてしかし何であったにせよ、美しくあろうがなかろうが、全ての残りの唇のようにいつも行為ではなかったか？言っておくれ…　知っている。自分の中の何処かでよく知っている…

…いつもそんなに美しい二つの唇、全ての残りの唇のように。
…二つの唇――本当に――そんなに美しい…

＊＊

…ただ小さな密告者たちにつつかれた。ある夜の最中だった。他の夜のような、ある夜…
「起きて」、彼らに囁いた…
「僕も君らに秘密を話すから」

恐らくいきなり目を覚ましたようだ！小さなベッドから飛び起きて眠そうな目を強くこすった。
普段は深い眠りについているのだが、僕とは反対に…

「座って」、彼らに言った。

とりあえず、座った…
「どんな秘密？」辛抱できずすぐに訊いた。（その唇――老いていることを除けば――奇妙だと常に覚えておいて…
お喋りで！噂好きで！痛々しくて！
…そして今ここでは分析する理由のない沢山のこと、何故って要点を失うから。）

―君らを信用していい？
―うん、決して裏切ったりしない。

―でも… 秘密のままではいけない秘密だよ！

www.b00k.gr

―つまり？
―全ての唇に伝えられなければならない秘密。いつかあの唇にも届かなければ。

少しの間沈黙した。そして自分の唇が黙る時あり得るのは――勿論滅多にない――言うことがないと！
「…ただそれらに言っておくれ」、言って乾咳をした、「世界の全ての唇のようだと…
世界の全ての唇のように実際に美しいと…」

「あなたは二番目」、皮肉っぽく微笑みながら答えた。（ある微笑で――どのようにかは知らない――しかし唇だけがそれをやりこなすことが出来る。
もしあなたが唇とあまり話し合ったことがないなら、一目で嫌いになる場合がある！）

「わたし達もそれらに言った」、続けた、「しかしそれらは醜いと答えた。
ただ美しい唇は存在しないと！」

「世界の全ての唇と同じように美しいとそれらに言っておくれ」、繰り返した。
「もしそれらの中深くを探せば本質的に世界の全ての残りの唇と何も違わないのを見るだろうと…」

「でもあなたは聞かない？」自分に叫んだ！（…実に大きく、時として自分の耳が聞きたいことを聞くのは正しいと思うほどに。）

「それらには言った！」叫びながら続けた。
「そして美しい唇はないと答えた！ただ同じだと、そして恐らく自分達の知った全ての唇より醜いと！」

（…唇は自分達に何を言われているか分からない時、ひどく神経が高ぶるかも知れない、あなた自身のから知っているように…
そして悪意！ひねくれた！そして気難しく！そして耐え難く！
…そして必要のない二千もの他の事柄、言ったように、詳細を分析して、何故なら絶対に要点を見つけないだろうから。）

…

自分は黙った。
そして自分が黙る時、それは折々それらをただ苛立たせるためにする！そうして、学ぶがいい。

「…それならそれらに君らは言う事がある」、落ち着いて付け加えた、必要な咳を付け足しながら、「自分たちだけで他の唇を愛そうとしていることを恐れなければならないと。」
そして少し前にまた叫び始めた――それをしただろうから、知っている――、続けた…

「…見なければならない、感じなければ、その裏にあるらしいものを――何に見えても――」、ずるく同時に悲しげに微笑みながら呟いたそれらに知り合った時

www.b00k.gr

からそんな長い間だけ、「奇妙な小さな秘密が一つある、ある単純で目に見えないが真実に上手く隠れて、徐に美しくする、いつも言っておくれ全ての唇…」

「…皆一緒に、覚えているよう、
…そしてそれぞれが別に…」

「その真実。
そしてその真実だけ。」

**

小さな一つの、微かな希望のメッセージが密かに至る処を旅して、唇から唇へ…
既にそれを知った、想像する、そしてあなた方のが。
そして恐らくいつか届く、自分の愛したそれらに…

…二つの最も美しい
…世界の唇…

12月20日

たった二枚の葉がと言うには…
沈黙の端にある一本の高い木からゆっくりと落ちてゆく。
ゆっくりと落ちてゆく、あの沈黙の端でその時彼らの行く手にあった風に踊りながら。

「土の上に落ちないで」、口笛を吹きながら彼らに言った。「一緒に来て…」
「何処へ？何処へ行くの？」

「枯葉が集まるところ…」

涼やかな風が一吹きして　世界中の端という端から枯葉を集めて運んできた…　海上の一吹きの風。
二人の恋人たちが踊っていたあたり、太陽が空高く輝いている間、雲が二人の周りを回っている間、二人の周りを巡る、青い水の上を優雅に。

そしてその時海もまた次第にに早く回転し、雲はその中に閉じ込められ、葉は海の傍らに集まり、二人の

www.b00k.gr

恋人たちはその中にたゆたい　風は海を白く、真っ白く凍らせ、宇宙の果てに雪を滴らせる…

雪は眠る月の上に落ち目覚めさせる。

その、まだ白い、真っ白な、彼らの傍に来た…
雪と結晶の惑星、氷と霧の惑星に滑ってゆく二人の恋人の傍に来た。
…しかし寒気さは彼等に触れることは決して出来なかっただろう…　どの寒気が広大な海の真ん中の二人の恋人に触れることが出来ただろうか？

そしてその時海は止まり太陽に言った：
「私に触れて…」

それは低くなり、そしておずおずとその唇をそれの中で消し止めた…

雪は溶け、風は黙り、葉は一つの露の海に落ちた。二人の恋人が優しく抱き合い、甘く語り合い、雪片がまだ少し彼等の視線を飾っている傍ら歩いていた一つの雨の海に落ちた…
一方では月が、青白く、彼等の世界を少しまだ飾っていた。

二人の恋人が生まれた蜿々たる道の真ん中を歩いていた…　金色に見える道をそれが今夜その色を振り撒く間。
太陽が彼等の周りを滑っている間進んでいた一方、道はそれと海の端へ旅して、そして星は宇宙の端までゆっくり漂っていた…

二人の恋人は今夜金の葉で満ちた一つの海、青くそしてまたその周りを回る一つの世界の中心で我慢出来ず泡立つ海に消えていった。
…しかし波は彼等に触れることは決して出来なかっただろう。どの波が広大な宇宙の真ん中の二人の恋人に触れることが出来ただろうか？

そして時間は彼等に言った：

「私に触れて」

…

二つの手が一つのように動いた。

そして時間は身を低くしてそれらの隣に佇んだ…

１２月２４日

www.b00k.gr

「誰かここにいる？」静かに言った、そして閉ざされた部屋は音階の列で溢れた。

多分誰も。

「誰かここにいる？」もっと強く言った、そして小さな屋根裏部屋を始めて音で満たした。

決して一人で喋ってはいけないだろうと知っていた、でもこれ以上耐えられなかった。その屋根裏部屋に上げられたときからそんなにも時が経っていた。それをこのシーツで覆いそして窓を密閉した時から。

これ以上耐えられなかった！何故それにはそう思えたか？数年前には物事はとても美しかった。
彼等の夜を満たしていた頃から、音楽で夢と心を満たしていた頃から、実にそんなには経っていなかった。何時からそんなに時が経った？

その周りに集まり不器用に白い鍵盤を叩いていた、彼等が子供だっ時から？その上に彼等がよじ登っているのを、その中に弦と薄板を隠す高価な黒檀の覆いを壊すのではと叱っていた時から？

いいや、そんなに時が経っている筈がない。
そして再び大きくなった後最初のレッスンを思い出していた。再び不器用に鍵盤を叩いていた頃、それに奇妙な音を強制しながら。
子供たちは遊びながら学んでいた、何故なら恐らく決して彼等にはもう一つの玩具でしかなかったから。大きなオルゴールのような何か…

いいや、あの頃からそんなに時が経っている筈がない！
家族の午後を満たした、彼等のダンスやお祝いを満たした頃。
皆が黄色い金の装飾の小さな腰掛椅子に座りたがり、重い茶色っぽい鍵盤カバーをあけて一緒に美しい時を分かち合った頃。

そう、あの頃はそれを愛していたに違いないだろう。
鍵盤の触れ方から、開ける前に茶色っぽい重いカバーを撫でる仕方から、どれだけそれが歌うのを好んだことから感じていた。
どれだけそれを気遣ったかから感じていた。常に調律済みで、綺麗で、かつては人々で満ちた、居間の中心部にあったことから感じていた。

www.b00k.gr

…

どのように変わったのか、実に、全てが。子供達は成長し家は小さくなったようだった。場所は充分でないと、そしてまだ巨大なピアノを持っている理由がないと言った。居間の配置を変える時で、そのピアノは何処にも収まらなかった。
そう、まだ美しい輝く覆いがあった、布の掛け物の小さな腰掛椅子、そして以前のように同じ旋律を奏でていた。それでもしかし子供達は成長しそしてそれではもはや遊ばなくなった。
小さな腰掛椅子は居心地が悪いようで、木材の色は明るい色の装飾に合わず、そして彼等の夜を小さな、真新しい小さな蓄音機がもはや満たした。居間の隅の角のある小テーブルに、満開の花のように美しく、全ての声を真似ることの出来る声で。
それの声すら。

恐らく本当にその家には場所がなかった。恐らくもはや無かった、恐らくもはや大きなオルゴール意外ではなかった。それ以上の何物でもなかった。

…

「誰かここにいる？返事をして、お願いだから。」

しかし誰も密閉された屋根裏部屋で音楽を聞いていなかった。
二枚の大きな白いシーツに覆われた一つのピアノからの音楽、暗闇と沈黙に閉じ込められた、何処か隅

に――或いは真ん中に？――何処でもない場所の。

* *

あの頃から本当にどれだけ時間が経ったか…
小さくて美しい蓄音機が彼等の夢と心にあった巨大なピアノに取って代わった時から。
それを譲る方法を探し始めた時から。グランドピアノ、高価な木材で作られた…　著名な製造元の一つの傑作、最良の状態を維持していた。

無駄骨！
人々は咲く花のような小さく美しい、蓄音機だけを買っていた。
野暮ったいピアノをどうすればいい？一つの巨大で野暮ったいピアノ？
そしてこのようなピアノが果たしてどうやって家にあった？このようなピアノは大抵コンサートや独特の店舗にあった。

いいや、このようなピアノをどうすればいい？いずれにせよ今や皆が老いたピアノを売っていた。もはや誰も要らない老いたピアノ…

そうして上げた、本当に大変な骨折りで、その屋根裏部屋に。
古い品々の物置に！

www.b00k.gr

* *

…その屋根裏部屋で大きな白いシーツに覆われる前に古い見慣れた物を識別した。
かつて寝室を飾った木製の長櫃…
居間の古い照明…
耐え難く軋み始めた時追い出した美しい揺り椅子…

その時まで何処に行っていたのか知らなかった。興味すらなかった。更には幾つかはそれを買った時に追い出された。真新しい一台のピアノ、それぞれの貴族的な家の宝石。
その頃から実際にそんなに時が経っていた？
子供達が成長した時から？

…

時折彼等は再び訪れた。その時は、まだ始まりだった…

シーツの埃を振り落とし、少し光が入るよう窓を開け、調律師を呼んで調律すらした。
そしてその後来た時のように急いで、また姿を消した。

その時、さて始めのころ、古い見慣れた物を識別した。
ある額縁。子供たちのおもちゃが入った籐の籠。古

いミシン。彼の前を昔に通り過ぎた品々。
大きな鏡のサイドボード、台所の小さなテーブル、赤ん坊の揺り篭。全てがもはや黄ばんだシーツに覆われていた。
形だけが、古い品々とともに屋根裏部屋に永遠に忘れ去られた輪郭が、何処でもない場所の何処かに。

あの頃からそんなにも時が経っていた？調律をやめた時から、白いシーツの埃を払うのをやめた時から？あの頃からそんなにも時が経っていた？
彼等の夢と心を満たしていた頃から？

他にも来ていた時があった、けれど見ていなかった、何故…
恐らく何かを置いていった、恐らく何かを取りに。その周りに何があるかもはや見ていなかった。
恐らく古い品々で一杯の屋根裏部屋。恐らく空っぽの屋根裏部屋、沈黙と暗闇に放置された老いたピアノだけの。何処でもない場所に放置された古いピアノ一つ…

「誰かここにいる？」静かに言った、そして閉ざされた部屋は音階の列で溢れた…　しゃがれた音階、暗い屋根裏部屋に放置された無調律のピアノの。

そう、年老いた！もはや同じピアノではない。その声はかつてのように美しくはない。
そしてあの蓄音機はそんなにも美しく歌った…

www.b00k.gr

…

しかしまたしても信じられなかった！あの掌以外の何でもなかった？触れていた掌、長い歳月の間触れていた掌？それ以外の何でもなかった、一つの… ただの音を奏でる箱？

されど覚えていた、喜びをもって、気遣いつつ、優しく触れていたことを！
そしてそれは出来る限り美しく歌った。たとえ彼等がその鍵盤を弾きながら叩いても、その最初のレッスンであっても、出来る限り美しく歌った！

「…なんてこと、誰もいない…」
大きなピアノは自答し、暗い屋根裏でその弦から出る音色はひどく外れているようだった。

「…みんな行ってしまった…」

辺りはがらんどうに感じた。
古い照明器具や美しいロッキングチェア、騒々しい子供たちのおもちゃや赤ん坊の揺り篭はもはやなかった。何もなかった。誰もその侘しい屋根裏部屋の何処でもない真ん中で——それとも片隅で？——聞いてはいなかった。

家にも誰もいなかった…

下の階は空っぽだった。子供たちはすっかり成長していた。多分ずっと前に去っていたのだろう。多分所帯を持ち住居を構えて。
多分彼らが残していったのはそのピアノだけだろう！運ぶのは難し過ぎた。他の場所に収まるには大きすぎた。
老いたピアノが老いた家の老いた屋根裏部屋に。何処でもない何処かに迷い込んだ家…

「それは残念」そう言って、外れた音調の流れが屋根裏部屋に響いた。黄ばんだシーツに覆われた一つのピアノから出る一律の音階。

* *

その時から後再び喋らないと決心した…

物事のあるがままを受け入れた。誰も求めなかった老いたピアノ… 手は触れたものを忘れる… 小さな蓄音機は明るい色の居間で今や花咲く…
悲しむ理由はない！大きくて賢い一台のピアノ。
ただあのシーツで覆われぬことを、あの暗闇に包まれないことを、そんなに孤独が触れないことを望んでいた！せめてあの暗闇に包まれないことを…
再び少し太陽を見ることを！

www.b00k.gr

…皆何処へ行ったのか？
あの頃からそんなにも時が経っている？

…音楽で家を満たした頃から？小さな腰掛椅子に座り一緒に歌っていた頃から？

かつてそれの声はそんなにも美しかった。果たして同じピアノではなかったか？いつも彼等の夢と心を満たしていた同じピアノではなかったか？そうではなかったか？

しかし彼等のお気に入りの音楽をまだ覚えていた！

奇妙な、酔わせる音楽！
それを聞く時は消した――覚えていた――灯りを。目を閉じてその中に自らを任せた。
陽気で同時に悲しい一つの旋律！
古いと同時に新しい！
恐らく単調で、しかし決して退屈ではない！

果たしてまだあの旋律を覚えていたか？
そう、忘れていることはあり得ない…　それのお気に入りの旋律！でも今やどうやって歌う？
今やその声はあの屋根裏部屋の湿気、あの沈黙の寒気に放置された。
どうやって？

…

…もし努力してみたら？

誰も煩わせない！何処でもない場所に忘れられた一台のピアノだった。そして過去からの一つの旋律。
しかし試みの価値はあるか？

もしかしてあった通りに覚えていた方がよかった？それは一つの小さな、死すべき、老いたピアノ以外の何物でもなかった。しかし旋律は？
不老の旋律！恐らく一台の新しい、調律済みのピアノに歌われる価値があっただろう。それはもはや権利が無かった…

いいや、それはそんなにも美しい旋律！
他のピアノが歌ったほうが、もっと新しい。花咲く蓄音機が歌ったほうが。美しい旋律は花咲く蓄音機が歌うためにある！それは閉ざされた屋根裏部屋に忘れ去られた一台のピアノに過ぎなかった。その旋律への権利はなかった。
それを覚えている筈すらなかっただろう。

恐らく記憶は事態を悪化させていた。

＊＊

そしてもしそれに言おうとしたら？
その旋律への冒涜、湿った暗い屋根裏部屋で調子外れに歌われるのは、でも…

…でも誰も煩わせないだろう…　それのためだけに

www.b00k.gr

歌っただろう！過去からの旋律。
そしてそれを歌う時はいつも灯りを消した！目を閉じてそれに身を任せた。そう、今それをしただろう…
暗闇の一台のピアノに歌われる一つの不死の旋律。
せめて一台の老いたピアノ…

誰も煩わせなかった…

…

最初の音階は小さな屋根裏部屋に不思議に聞こえた。疲れた弦から、時の打撃に打ち負かされた弦から調子外れに聞こえた。

止まった。
いいや、もはや同じピアノではなかった！そして実にあの頃からそんなにも時が経っていた！

しかし続けたかった。再び努力した。最初の音階を歌いそして恥ずかしさに満ちてやめた。

「誰かここにいる？」おどおどと尋ねた。

誰かに見られたくなかった、聞かれたくなかった！もっと新しいピアノのための旋律だった。一つの不老の旋律、不死の！一台の老いたピアノがどうやってそれを歌うのか？何処でもない場所に忘れられた一台のピアノが？
しかし誰もそこにいなかった…　誰も再び答えなかった…

調子外れの、しわがれた旋律で静かに再び始めた。繰り返し繰り返しやめては再び始めた。それを忘れてしまったかのようだった。でもそれを忘れることはあり得ない…
一台の大きくて賢いピアノだった！それを忘れることはあり得ないと知っていた。その中に深く閉じた一つの旋律だった。
ただ調子を掴めなかった…

努力が必要だった。
もっと努力しなければならなかった。
恐らくもはや唯一出来ることだった！その老いたピアノ、二枚の埃だらけのシーツに覆われた、その暗闇に何処でもない場所に、もっと努力しなければならなかった！知っていた一つの、その中に深く秘めた旋律…
同じ旋律だった…

＊＊

…その疲れた弦から洩れるその一つの旋律…

閉じられた屋根裏部屋に突然温もりと共に一つの旋律が溢れた！時に忘れ去られた屋根裏部屋を壊れた音階の一つの旋律が満たした…

www.b00k.gr

そう、同じ旋律だった！感じることが出来ただろう、同じ旋律だった。そして同じピアノだった。同じピアノが忘れたことのない一つの旋律を一層強く歌っていた。
その中に閉じていた一つの旋律。

…

暗闇と湿気に長い時放置された一つのピアノにしては予想外な声で歌っていた同じピアノだった…　果たしてその頃からそんなに時が経っていた？

もはや知らなかった！知りたくなかった！

何も覚えていたくなかった、その弦に溢れていた、その夢と心に溢れていた調子以外は…

…そしてその隣に古い揺り椅子が調子外れに軋むのを聞くことが、籐の籠の横で騒々しい子供のおもちゃが溜息をつくのを、赤ん坊の揺り篭が音楽の調子に生き返るのを聞くことが出来ただろう…

あの頃からそんなにも時が経っていた？

いいや、まだ同じピアノだった！同じ椅子、同じおもちゃが埃を被ったシーツから識別されていた…
閉じられた屋根裏部屋に輪郭だけ、忘れ去られた形。

…

そしてそこ、それらの間に、それらの隣に、更に一枚のシーツに覆われて、暗闇と湿気のそこに、同じ旋律の調子に花咲く蓄音機。
同じ旋律の調子に全てが花咲いた…

…暗闇に歌っていた一台のピアノからいつも洩れていた同じ旋律。

…常に占めた同じ旋律、わたし達の心
そして夢を…

１２月２６日

www.b00k.gr

「かわいそうな星、あなたはどうなってしまうの…
あの酷い彗星…」

「あれについては何も言わないで。自分の知っている一番良い彗星。」

「どうして？」

「あなたに言うのが間に合わない、行かなくちゃ。」

* *

「かわいそうな星、何て大きな爆発…
…ある彗星のせいだって言っていた…」

「いや、何も悪くなかった。」

「つまり？」

「あなたに言う時間がない。止まれない…」

爆発の光、もはや消えた一つの星からの光り、空間に急いで旅を続けた。そして全ての晩と同じ或る晩に星を見ていると、それはもっと青い一つの惑星に着いた…

「不運な星…　この光が過ぎるや、あなたは永遠に消滅するだろう…　不運な彗星…　この光が消えるや、あなたも消えるだろう…」

「私たちは不運じゃない…　私たちは全ての星の中でも幸運。」

「どうして？」

「あなたに言う時間がない…　止まれない…」

「私を一緒に連れて行って…」

…

もう一つ青い惑星を後に残した。それが失われるのを、小さくなり夢の端に消えるのを見た。無限を旅するのは初めてだった。すこし困惑しているように感じた…

…君の夢の端を飾っていた星々が君の隣を通り過ぎ、君の中で消えてゆくのを見るのは小さなことではない…　自分に向かってやって来るのを見て恐れた。自分は裂けるだろう、割れるだろう――数千の破片に――いずれ…

www.b00k.gr

しかしふたりの友達の光が自分を守っていた、その中に自分を隠していた。ふたつの星たちが大丈夫であるように。

「どれだけ宇宙を旅している？」それらに尋ねた。
「あなたはどれぐらいの時間が欲しかったかしら？常にそれとも私たちと知り合った瞬間から？」
「君らと知り合った瞬間…」時間が無意味な時はなんと美しいか、考えた。

「それでどっちへ向かっているか知っている？」

「あなたは何処へ行きたかった？至る処それとも何処でもない？」
自分が何に取り付かれたか訊かないで――自分は夢の端にいたとあなた方に言っておく。
「何処でもない」答えた、更に一つの赤い惑星を通り過ぎる間。

「何処にも行きたくない！」

＊＊

僕は自分の周りにある色とりどりの惑星たちと、青や白や赤の恒星たちを眺めていた。黒い環や多彩な穴―洞穴。空のない雲と雲のない空。全て行き場がないのはなんと美しいことか…

「気の毒な星」、他の星たちが彼らにそう言うのが聞こえた、「とても可哀想…」

「だけどどうして可哀想なの？」
「無限の片隅に消したから…　あなたの光が通って失せる…」

「僕の光は決して失せない…　あなたたちはじっと動かない…」

「なんですって…」

けれど星たちの声は素早く消えた。確かにその光は留まる時間を持たなかった。

「ありがとう、一緒に連れて行ってくれて」僕は彼らに言った。

「こちらこそ」、そう答え、「私たちもあなたが中にいてくれてよかった。」

「貴方たちは長く一緒なの？」

「あなたと知り合って以来、そう言わなかった？」

＊＊

何処とも知れぬ場所の真ん中は途方もなく美しかった。その時まで見たことのなかったものを見た。想像したことすらなかった。
四角、多角形、円柱の惑星たちを見ていた。苛立つと光の変わる恒星たちを見ていた。ビロード色の月た

www.b00k.gr

ちを見ていた…
　全てが虚空に浮き、しかし常に何かで支えられているようだった。動いていても永久に不動のようだった。色彩豊かな彗星たちを除いた全てが。そう、僕の観ていた彗星たちはとても美しかった…
　色つきの長い尾が、走りながらその夢の端を去ってゆく小さな光る玉を追いかける。その彗星たちはとてつもなく美しかった！
　僕は自分の星たちに向き直った。
　「挨拶してよ」彼らに言った。

　「私たちは二つの星…　二つの星の光が旅をする…」

　「僕の知らないことを言っておくれ。」

　「全部知っている、あなたは言われるのが好きなだけ…」

　「恐らく」答えた。「何故なら宇宙の星たちはあなた達を気の毒に思っている？」

　周りの世界がゆっくり僕たちの方へ近付いていて、その後滑って僕たちの後ろへ消えていくのを見ていた。ある時は僕たちの後方においてゆく世界を見つめるのが好きだった。その他の時にはただ前を見つめるのが好きだった。

　「…理屈に適っている」、僕に答えた。「空の星たちは私たちを気の毒に思っている、何故なら何が起きたか知らないから…」

…

　ふたりの友達のひとりが喋り始めた。

　「自分は――覚えている――そらのあの暗い角に囚われていた。永遠にここにそして今囚われて。
　あの隅っこの他の星たちの隣――様々な色彩の星たちの仲間が一つ。一緒に育って、一緒に私達の通りを照らす光から光を満たした。行く手にある星たちに一緒に光をあげた。
　いつも一緒、宇宙の端に星たちの仲間が一つ。
　綺麗だった…」

　「年月は過ぎ、けれど時間は星たちには数えないと知っていて。何故なら星たちにはここや至る処、今と永遠は存在しない。
　何故なら星たちは何処にいようと、何時生きようと、至る処で永遠に生きる。特にあなた、青い惑星の輝き、知っていなければならなかった。星たちは永遠に生き、そして何処に生きようと至る処で同じ。
　そうして私たちには場所は無意味。時間は無意味…
　…至る処に永遠に『ここ』と『今』だけが存在する。」

　「でも世界の端の向こうで何が起きているか君に言う光を君は持っていた！」

　「私の光は同じじゃなかった。光は通り過ぎて消えてゆく…　光は決して戻らない…　それは旅していたけれど私は空の埃を被った片隅で待っていた。」

www.b00k.gr

「でも君は隣に他の星たちを持っていた。」

「…全てここと今に囚われて…」

「そしてその時彗星が来るのを見た…
…そう、それをもっと前に見たことがあると認める…」

**

もうひとりの友人に向き直った。二つの星たちを包む豊かな光の中、その姿はぼんやりと見分けられていた。覚えている、何処でもない場所の端の何処かを旅している間、黄土色をした多角形の星々の二つの銀河の間を。

「君は？」優しくそれに尋ねた、「僕について何か言うことはある…」
「どうして宇宙の星たちはあなたを気の毒に思っているの？」

「星たちは私が見えない」、言った。「私の友達の輝きのなかに失われる。」「しかしもし私を見たら悪態をつくでしょう！」
「道理に適ってる、空の星たちは何が起きているかを知らない…」

少しの間やめ、そして黄土色の星々の二つの銀河を通り過ぎた時、再び喋り始めた。

「私はここと今に囚われていることを感じたことはなかった、あなたが知るとおりでしょう」、僕に言った。
「私は、告白しなきゃならない、世界の被造物のうちで最も幸運だと。旅していた、ひとりでも、宇宙の端まで。
星たちが自分の中で失われていくのを見ることができた。色とりどりの尾でそれらに触れていた、撫でていた。その後去っていた。いつも去っていた。留まる時間は決してなかった。
私はぶらぶらとあなた方の夢の端を走るちっぽけなただの球、覚えている？」

「私はそんなにも幸運な彗星だった。時間は自分にとって無意味だった。場所は無意味だった。自分の道を照らす光から光を満たした。行く手にある星たちに光をあげた。
美しかった。」

「どんな星も見たことのない場所を見たことがある…　色彩豊かな太陽たちに触れたこと、水晶の惑星たち、光の滝が――指輪のように――透明な惑星たちを包むのを見たことがある。惑星たちの中に無限を見たでしょう…」

「色とりどりの彗星、どれだけ君を羨んだだろうか！君が見たことのないものはある？」

「黄土色の銀河を見たことがない、白と赤の穴ー洞穴を見たことがない。青い惑星たちを今までに見たことがない…」

www.b00k.gr

「…旅していた、でもいつも通った場所を通っていた。去っていた、でもいつも出発した星たちへ戻っていた。初めと終わりのない一つの旅。後で分かったように、至る処と全て、『ここ』と『今』。同じ太陽たち、同じ月たち、同じ透明な惑星たち…
いつも同じ旅…」

**

「どうしてそれらと話し合わない？
君に自分たちのことを話して、君の秘密をそれらに話す。」

「いつも走っていた、いつも去っていた。『幸運な彗星、私を呼んでいた、夢の端の色彩について話して。』
間に合わない、答えていた。行かなきゃいけない。
『君を待っている…』」

…

ある暗い洞穴の横をその時通りかかっていた。
「どうして色とりどりではないの？」それらに訊いた。

「光が通り過ぎてもそれに触れない…」
「僕らが照らそう。その中に消えよう…
いずれにせよ光は通って消える。」

その中で世界は変わった。僕ら三つは一つの白い宇

宙を旅する一つの黒い光となった。黒い太陽たちと灰色の惑星たちの間を。
その時一つの白黒の彗星が僕らに近付いた…

「不運な彗星」、僕らに言った、「君はどうなってしまうのか。この酷い星…」
「それには何も言うな…　知り合ったうちで一番いい星だ。」

「何故？」

「言うのに間に合わない、行かなきゃ。」

それが僕らの後方に消えるのを見た。
「君らふたりはどうやって知り合った？」尋ねた。

**

僕の幸運な星が喋った…
「ふたりともここと今に囚われていた、難しくはなかった。
…でも何千年もそれを待った。小さな仲間の星たちがそれを待っていた。みんなそれに何か尋ねることがあった。でもそれは毎回答える時間がなかった。一つの答えのために何千年も待たなければならなかった。たった唯一の答えのために。」

色とりどりの穴を通り過ぎながら僕らは沢山の色彩を変えた。そしてあの白い洞穴に入った時だけ、色彩

www.b00k.gr

豊かな世界へ再び出た…　水晶の惑星たちと鏡の月たちの、暗い一つの宇宙に一つの白い光。
　…そしてそんなにも青い惑星たちが集まっているのを見ていたのは初めてだった。白と青、それらの夢の端に黄色の太陽たち…
　…水の惑星たち、紙の月たちと…

「…そして君はその時何を尋ねた？」僕の幸運の星に言った。

「何も訊かなかった。そんなにも訊く事があって何も聞くのに間に合わなかったでしょう…
『光は戻らない』それだけ言った。
『通る光は絶えず消えていく…』

『一緒に連れて行って…』」

僕の幸運の彗星に向き直った。

「…言うことは沢山あった、が何も答えなかった」、僕に言った。
「光は決して戻らないことだけを考えた。光はここと今に囚われないことを…」
「その後それの方に向かった。」

「…不思議な感触だった…」

…

僕らは旅していた、覚えている、青い惑星たちの間を。僕らの光は宇宙の全ての洞穴の色彩をしていた。色とりどりの一つの光が青い惑星の間を旅している…
　夢の端で美しかった。

「かわいそうな輝き」、青い惑星たちは僕に言った、「どれだけ大きな爆発があなたを吹き飛ばしたか…　あなたの光はもうあなたと一緒に通って失われてゆく。」

「聞いた、二つの酷い星たちのせいだと…」

「酷くない…」、答えた。「知り合った星たちの中で一番いい…」

「何故？」

「あなたに言う時間がない…

行かなきゃ…」

「…　　…」

１２月３０日

www.b00k.gr

たった二つの仮面がと言うには。二つの顔の無い仮面…
二人の恋人でもあり得た、二つの花、何処でもない場所の端の二つの星。しかしそれらは小さな劇場でたまたま別の役割があった。そのようにたまたま、何と言えばいい？
二つの古典的芝居用化面、もはや覚えてはいないある道の端の小さな劇場の。

一つの古いテーブルの上に置かれていた、舞台装置と衣装のある部屋の隅の。皮で出来た典型的な仮面。全ての仮面がそこで切られているように切られた。顔を覆うだけのために作られた――それらは、ご覧、いつも大きな意味を持っていた…

「ほら、ほら！」、顔の無い紳士が言って二つのうち一つを掴んだ。「リハーサルの始まる時間だ。」

リハーサルの始まる時間だった。もう一人の顔の無い紳士が二つ目の仮面の後ろに急いで隠れた。
用意が出来ていた。

「３－２－１、始まる…」

＊＊

それまでそんなに美しい仮面を見たことはなかった。
そんなにも本物だった。あらゆる存在する顔がそれに嫉妬しただろう。滑らかな皮は肌の色だった。ぴんとした皮、若々しい。
そんなにも表情豊か。だれか本物の職人によって切られた皮。目の形、口の形は然るべき表情を完璧に表現していた。一つは、にこやかな、その後ろに踊っている一つの世界を隠していた。もう一つは、悲しみ、その後ろに裂かれる一つの世界を隠していた…

…

リハーサルは上手くいっていた。そしてそうでなければならなかった。
数日後には上演が始まるだろう。ミスの時間はあまりなかった。重大な初演のために全てが完璧でなければならなかった…
…幕が上がるだろう瞬間のために。

…

…それらの目は実に芸術的作品だった！それらを見つめ賞賛していた。それぞれの表情がそれらの目の後ろに充分に隠されるようデザインされていた。意味を持っていなかった目。誰がその後ろにある目に注意を払っただろうか？誰が皮の細い切れ目の後ろに隠れるものを見ていただろうか？

www.b00k.gr

二つの最初の切れ目、大きな微笑と引き上げられた眉に調和的に結ばれていた。二つのにこやかな切れ目の後ろに二つの目が踊るのを想定して…
他の二つの切れ目は、痛みに顰めた二本の眉の下で涙を流す不揃いの二つの目の見本。悲しみに険しく閉じられた一つの口の上に…

そう、リハーサルは上手く行っていた！間違いなく成功だっただろう。どちらにせよ芝居は古かった――試験済み。
成功だろうと疑いは無かった。

＊＊

しばらく小さな劇場はとうに静まっていた。
再びそれらの場所に戻っていた。衣装と装置の部屋の端にある小さなテーブルの上に。

確かに注目すべき公演だったろう。時代物作品。舞台装置だけでも分かる。古典的な外見の建物。しかし衣装も、小道具も、君を全て過ぎ去った時代へと引き込むだろう。
人々と評論家達は熱狂するだろう、疑いなく。道の端の小さな劇場には偉大な公演だったろう。
それでも今のところまだリハーサルだった…

「３－２－１、スタート…」

＊＊

リハーサルは日常的に、通常午前の時間に行われていた。その時だけ二つの我等が仮面が――二つの古典的舞台用化面が――舞台に現れていた。その日の残りは芝居の小道具のある部屋に忘れられて暮らしていた。楽屋の隣の小さな部屋…
古い木のテーブルの上に…

…

「心配しないで」、哀しげな仮面がもう一つに言った。

「心配しないで、時はすぐに過ぎる、見ててご覧…リハーサルは済み、初舞台は行われ、芝居は消え、その後私たちをまたそっとしておいてくれる…」
「全ていつか終わる。辛抱しなさい…」

「もう我慢できない」陽気な仮面は哀しげに答えた。
「毎日同じ科白。リハーサルの度に。公演の度に。そして私が喋らなくちゃならない！楽しい科白にはもう耐えられない…
決して終わらない…　長い間何も終わらなかったように。次のお芝居はどうして違うと言えるの？それぞれのお芝居に陽気な仮面はないの？それぞれのお芝居に…
もう耐えられない…」

www.b00k.gr

「勇気を出して」、哀しげな仮面がまた言った、「君の気持ちは分かる。」
「今迄させられてきたことがわたしには気に入っていたとあなたは思っていて、それを今日言うの？
退屈な哀れな科白…　多かれ少なかれ同じの今日まで芝居の度に演じてきた…
歌ったり微笑んだりさせられるほうがいいとあなたは知っているのに。機嫌の悪い科白は飽き飽き。」

「しかし残念ながらその肌が変わることはない、君の造詣が変わる」口の位置にある哀しげな切れ目の下で微笑みながら付け足した。
「…そのままよ、文句たらたら埃を被って永遠に。
泣きっ面道化役だけにぴったり。」
「ひどい有様だねと言うよ…」

「…ひどい有様」繰り返して、笑う勇気を見つけた。
哀しげな口元と目の切れ目の仮面に過ぎなかったのではない。陽気な顔の仮面の隣で、笑う仮面…

「よくそんな気分になれるもんだ！」陽気な仮面は言った。

「３、２、１、スタート…」

＊＊

…今日は皆苛立っていた。
科白を忘れ、してはならない時に誤った動作をしていた…　何がいけなかったのか分からない…　恐らく初演が近付いていた。恐らくただついていない日だった。それでも何も正しく行われなかった！
場面は何度も何度も繰り返され、それでもしかし毎回より酷くなっていた。
結局リハーサルは午後へと中断されて仮面たちは小さなテーブルへ再び戻った…

…

しばらく二つは黙っていた。
衣装と装置を見つめていた…　それらは運がよかた！始めに一度試してそれから小さな部屋に置かれた。再び出すだろう、言った、最終のリハーサルで…
でもそれなら何故リハーサル毎にそれらを連れ回すのか？ただ大きさだけのために？

「君は今日のことで言うことがある？」、とうとう悲しむ顔の仮面が訊いた。

「何て言ったらら？可笑しな科白にはもう耐えられないことだけは知っている。面白くない冗談、愚か歌、そして恋人のあの間抜けた独白…
…そして午後の間ずっとそれを通さなければならない…

www.b00k.gr

分からないの？私はにこやかな顔の真面目な仮面。そして彼らは私を笑いものにしたい…」

悲しむ顔の仮面は口のための裂け目の下で微笑んだ。
「全てを感情的に取らない」、彼女に言った…
「愉快な仮面の役を演じるんだ。舞台でだけ…　無理？」

「でももうふりをすることは出来ない、あなたには言うわ…
疲れた。
毎回同じこと…」

「落ち着いて、分かるよ。それでも僕等の職業だ、忘れないこと…
他に何をするか知らない…」

*** ***

午後のリハーサルは午前のよりずっとよかった。

全てが調子を取り戻したかのようだった。失ったことがないかのように。会話は正常に進み、混同や途切れは無く、悲しみの場面の緊張は笑いの場面の調和した投与により滑らかに治まり、意味と逃避のバランスは――常にテーマとの関係において――納得ゆくものに出来上がった。
観客は満足するだろう。
皆が満足するだろう…

…

「もう無理」、笑い顔の仮面が言った。「少なくとも私達の役割を交換出来たら…」

「よかっただろうね」、ひび割れた仮面が笑いながら言った。「でも少し考えて…　それはあり得ないだろう…」

「どうして？」

「…でもそれなら僕等はどんな俳優だっただろうから？」
答えた、そして一緒に笑う装置や衣装を少しの間巻き込みながら大笑いに弾けた…

「よくそんな気分になれるもんだ…」

*** ***

いいや、今後はリハーサルでミスの余裕はなかった！数日で幕は上がり一つの劇場で上演が始まるだろう――たとえ小さな劇場でも――人々で一杯の。
そしてその人々は期待するものを見なければならない。期待以下は何も…

「最悪、最悪！」奥で声が聞こえた。

www.b00k.gr

「もっと感情を込めて…　この瞬間痛んでいる！痛んでいる！」
「もう一度やってみて。」

不十分な表現？不十分な理解？場面はいずれにせよ滑稽に見えた…

「最低、最低！」再び叫んだ。
「被っている仮面のことを少し考えて！痛みから歪んだ一つの仮面…　それに触れてごらん…　それを感じてごらん…　仮面は魂の鏡！
君の魂の！この瞬間痛む君の魂の…　君の魂は痛みに歪んでいる…

もう一度やってみよう…」

事態はもっと良くなった、実に。役は奥の声が望んでいたそれにより近付いた。
しかしまた再び何か欠けていた！何か漠然とした。これ迄にもっと役に入り込んでいなければならなかった…　奇妙！もっと練習が必要だった…

…明日から事態は変わらなければならなかった。一日に二回のリハーサル、そして各リハーサルは初演の前の最終であるかのように。全てが完璧にならなければならなかった…
初演ではミスの言い訳は無い。

＊＊

「どうした？」笑顔の仮面が尋ねた。「知り合ってから初めて君が悲しんでいるのを感じる…」

「考えているの…」二つ目の仮面が答えた。

「何を？」

「奥の声が今日私達に言ったこと…　あなたは何も考えていない？」
「ふりをするのにもう疲れたことだけを考えている。
他に何も。」

「それでもしかし奥の声を聞かなかった？今日までそんなにも熱く感じたことはなかった…　仮面は、言った、魂の鏡。触れなければならない…　感じなければならない…」

「感じることはなにも存在しない。物事は単純…　僕等は不似合いな顔の二つの仮面。」

「…それでもしかし、仮面は魂の鏡…」ひび割れた仮面は続けた。「…そして私は痛みに歪んだ一つの仮面…」
「はっきりと見える…」

www.b00k.gr

＊＊

今日から全てが実際に変わった。小さな劇場でもはや何も同じではなかった。主役の二つの仮面はこれ以上充分でないように思えた…
そのように今日は皆が舞台衣装を着ていた。前の時代を示す家具が彼らの周りに、一方で古典的外見の建物が踊りの場面の飾り付けを満たした。
まさに各リハーサルが今後は重大な初演前の最終のようだった。
全てが完璧でなければならなかった。

…

「駄目、駄目そしてまた駄目！」席の奥で声が叫んだ。

「この歌は朗らかな歌、活気のある、熱烈な…　君の声は朗らかに発せなければならない。ただ朗らかに聞こえるだけでなく…
…君の服を考えて。愉快な人の服…
…君の仮面を考えて。その中深くに感じることを表現する一人の仮面…　幸せなひとりの人！

もう一度やってみよう！」

著しい変化があった。疑いない改善。

しかしそれでも再び解釈は明らかに役の従属だった…　それが分かっていた。しかも彼も何を具体的にしたいか知らなかった…
彼も何のせいか知らなかった…

「やめて！」叫んだ。
「少しの間あなた方であるのをやめて考えて…　役者達！今までの人生で沢山の役を演じてきた…　それらを思い出して！別の役の同じ役者達…　あなた方はすることが出来る。出来ないことは何も無い！
あなた方にはなんでもない。ただもう一つの役…

…君は明るい一つの仮面、分かる？私の声に君を触れさせなさい…　君の形を君を導かせなさい…　君は明るい一つの仮面…」

「３－２－１、始まる！」

…

「今日彼の声は苛立っていた、そうじゃない？」悲しむ顔の仮面が言った。

「気付いていた」笑い顔の仮面が答えて微笑んだ。
「しかし寧ろ絶望の声だった。初演は近付いていて状況は望む通りではない。何か欠けている、知っている…　自分も何か欠けていると感じる…」

「重大な初演が近付いていてまだ何か欠けている」

www.b00k.gr

悲しむ顔の仮面が同意した。
「しかし物事は単純。奥の席の声は正しい。仮面は魂の鏡…　これももう一つの役…　私達は何よりも先ず役者…　役者以外の何者でもない！そして役者としてそれぞれの役を演じることが出来る。」
悲しむ顔の仮面は恐らく悲しみの色調を帯びていた…

「あれだけのご機嫌が何処へ行ったのか！」
明るい顔の仮面が意外にも言って、一緒に笑った装置や衣装を少しの間巻き込みながら、大笑いに弾けた…
一つの明るい顔の仮面が初めて笑いに弾けた。

「３－２－１」、そしてリハーサルは始まろうとしていた…

＊＊

…別の場合では恐らく実際に最良のリハーサルだった。
非の打ち所のない同調のしっかりした会話。動作に自由。場面切り替えの正確さ。感情の緊張の目覚しい解釈。性格と役の生地の円滑な展開。
そう、リハーサルは脚本に値した、と言えただろう。

しかしこれはどれでもいいリハーサルの一つではなかった。間もなく人々で一杯の一つの劇場で幕が開くだろう。最終の一つ前のリハーサルだった！
そしてそのように場面の切り替えはもっとよくされなければならず、会話は最大限可能な快適さで進まなければならず、感情と性格は最大の技巧と自然さで示されなければならなかった。

「駄目、駄目そしてまた駄目！」観客席の奥の声が叫んだ。「駄目！」
「自分達で見ていないのか？分からないのか？

君等の前の観客席は間もなく人々で埋まる！見たいものを期待している観客達。見なければならないものを。それ以下はない！
そして君らはそれを与えなければならない！君等は役者以外の何者でもない、忘れるな…」

www.b00k.gr

皮で出来た二つの古典的舞台用仮面に向き直った。

「君等は主役だ」、その後ろにいた二人の顔の無い紳士達に言った。「芝居の二人の主役！」

「全員の視線がその時君らに向けられる！」

「君等は主役で彼等は君らの観客に過ぎない。
君等がミスをして嘲りたい…
君等の役を正しく演じて君らに拍手したい！君等を称えたい！」

「評価される！
君等は評価されてその立場からは彼等は正しい。
見たいものを見なければならない観客達…

君等は役者で彼等は観客！
仮面に君等を導かせなさい…」

「もう一度行こう…」

…

…舞台装置、衣装、そして木のテーブルに置かれた皮で出来た二つの古典的マスクのある小さな部屋で沈黙が支配した…　楽屋の隣の小さな部屋で。

恐らく前回のリハーサルの失敗を考えればもっともな沈黙。甚だしい失敗。他のどのリハーサルよりも酷

いリハーサル。

「心配しない！」明るい顔の仮面がもう一つに言った…

「…ここまで過ぎた時は今も過ぎてゆく、分かるでしょう。明日の午前中のリハーサルは終わるでしょう。午後の初演はそれも行われるでしょう。上演は終わって私達はまたそっとしておかれるでしょう…
ある日全てが終わるでしょう…　辛抱して！」

「もう耐えられない！」悲しむ顔の仮面が静かに言った。
「そんなにも努力した、それでも主役達は私を感じることが出来ない。私は一つの悲しむ顔の仮面、分からないの？
目や口にしては細い切れ目の一つの仮面。その後ろには一つの失われつつある世界だけが隠れているかも知れない一つの仮面…　見えないの？」

「勇気を出して」、明るい顔の仮面が言った。「君の気持ちは分かる。」
「君のことが僕には分からないと思ってる？僕も出来るだけ努力しているけれど彼等は僕を感じることが出来ない…　単語毎に、動作毎にもう一つの悲しみの色調がある。
…でも僕は明るい目や口の切れ目の一つの仮面、それが見えないのか？僕はそんなにも明るい一つの仮面！」

www.b00k.gr

「…ただ残念なのは観客達が僕等を評価しなければならないだろうこと…」、ひとりごちながら付け加えた。
「果たして何故僕等を評価しなければならないのだろう？」

* *

その日は結局訪れた。他のそれぞれの日のように。
重要な一日、小さな劇場には大きな一つの。そしてもはや記憶に無い或る通りの端の一つの小さな劇場に過ぎなかったとしても。
最後のリハーサルだった。その晩初演は始まっただろう。幕は観客で一杯の一つの劇場の前で上がるだろう…　初演前の最終のリハーサル！最初で最も重要な上演の前の！

全てが非の打ち所のないものでなければならなかった。完璧なリハーサルは常に最高の保証。照明、舞台装置、会話、歌、動作、全てが自然に示されなければならない。
観客達は全てを評価するのを、拍手するのを或いは黙るのを、崇敬するの或いは嘲るのを心待ちにしているだろう。全てが完璧でなければならない。何はさておき役者達だった。人々は満足しなければならなかった。役者達であり、役者達として他の何よりも拍手を必要としていた。でも勝ち取らねばならなかった…

役者であり、出来る限りより自然に見せなければならなかった。役に入り込まなければならなかった！更なる別の一つの役以上だった。仮面に彼等を導かせなければならなかった。難しくはなかった…

…小さな劇場の役者達と観客達。

…

最終のリハーサルは、最悪だった。
全くの失敗！
他のどの時よりも恐らく不出来。役者達は科白を忘れ、動作は予め考えられたようで、喜びや悲しみ感情は偽物…

どのようにして全てがそんなに酷くなることがあり得たのか？役者達だった。古い役者達だった、経験を積んだ！どうしてたったもう一つの役に捕らわれる？
いいや、彼等は役者達で役者達のように知っていた——推測する——何をしなければならないかを！
どのように表現するかを、どのように動くかを、どのように感情を示すかを…

…

席の最後尾からの声は彼等を奇妙に抱き、優しさと厳しさで触れた。最終のリハーサルだった！
彼等に優しくそして同時に容赦なく触れた。
その声は奇妙だった…

www.b00k.gr

「駄目、駄目、どれもまた駄目！」執拗に叫んだ。

「全部忘れて！
今日までに君等に言った全部を忘れて…
全てが間違いだった！どれも間違いだった！」

一座は向き直って観客席の奥の声の側を見つめた。全員が黙って、無表情で。
全員、喜びと痛みの表情で固まった皮で出来た二つの古典的劇場用仮面以外は。

「今日まで君等に言ったことは忘れて」奥の声は続けた。「それを君等の内から出して。」
「今日まで演じたことのある全ての役を君等の中からだして！今日まで演じた役は意味がない…　君等は役者ではない…　君等は何でもない！」

仮面と役者達は小さな劇場の舞台で、観客席の奥の声のほうを見つめ固まっていた。

「君等は役者じゃない！」彼等に叫んだ。「君等はなんでもない！」
「そして君等の周りに観客達はいない、私もいない、舞台装置も照明もない…　他に何もない、君等以外は！」

「…今晩、幕が上がる時、観客達も役者達もいない。舞台の真ん中にただ君等以外何もない…」

…

「…そして芝居を見るのは、今晩、君等だけだろう。
君等が今晩の観客だろう！君等が役者達のない一つの芝居の観客達だろう！

…そして観客達は見たいものを見なければならない！　…観客達はいつも何を見たいか知っている…

そう、
今晩役者達は無用だろう…」

www.b00k.gr

＊＊

既に重大な初演の時間になった。彼等は既に正しい位置についていた…

間もなく幕が上がり、しかしそれでも周りに予期せぬ穏やかさを感じただろう…　小さな劇場は間違いなく人々で満ちていた。期待していたものを見る準備の出来た人々。期待していたものに笑って泣く準備の出来た人々…　少なくともそれ以上！

でももはや何も案じることはなかった。芝居は古かった――試験済み…　仮面は、実際に芸術的作品…　舞台装置――前世紀からの建物――、時代の衣類と小道具、全てが一つの偉大な上演に役立つだろう！果てしない無いリハーサルの後、全てが準備できていて幕が上がるだろう…
ビロードの布が間もなく上がり始めるだろう…

いや、もはや案じていなかった！小さな劇場の人々は正に期待していたものを見るだろう！期待していた少なくともそれ以上…　そして最後には間違いなく力一杯拍手するだろう！本物の拍手、心からの！
恐らく小さな劇場には思いがけない拍手…　一つの古い芝居には思いがけない拍手――それでもしかし時代を超えた二つの仮面――古典的な舞台装置と時代のデザインの衣装…

役者達の無い芝居、実に見たかったものを見ただろう観客達と…
常に見たかったもの…

いいや、もはや案じてはいなかった！終わりのない無用なリハーサルの後で幕が上がるだろう…

そして観客達は常に見たかったものを見ただろう…

…一つの*真実*。

1月1＆2日

www.b00k.gr

恐らく自分の人生の中で初めてひどく何かに感謝しなければならないと感じる。決して見つけることを期待していなかったたった５つの手描きのページを惜しみなく自分にくれたことに感謝することを。

自分の人生を――一晩で――変えた手書きの５ページ。

www.b00k.gr

確かに街で一番大きい書店だっただろう。
大量の本が一つの場所に集められていた。それらは木製の台の上に広げられていた。果てしない棚に並んでいた。棚は天井に届いていた。
並ぶ本棚、一つの後にはもう一つの。そして人々。大勢の人々。あらゆる年齢、あらゆる種類の人々がその書店にいた。街で一番大きい書店。

しかしそこには、順番で最後列の本棚の、全ての棚の一番高い場所には一冊の孤独な本しかなかった。
書店の人々を気にかけないほど孤独だった――あらゆる種類の人々からなるまとまりのない世界。無関心な書店の果てしない棚や本箱も気にかけないほどに孤独だった。それほどにも冷たく無関心だった。

この本には自分の物語があった…

www.b00k.gr

…

…ある朝ある印刷所の奇妙な機械の傍らで目が覚めた。他の沢山の同じ本と一緒に縛られて目覚めた。それと同じ本だったに違いない。しかし詳細を覚えていなかった。すぐにまた眠りに落ちてしまった。
その本は――覚えているよ――生まれた時疲れていた。

二度目に目を覚ましたのは一つの手がしっかりと自分を掴んでいたからだった。よい目覚めだった。しかし長くは続かなかった。手が開き本はその場所に置かれた。恐らく書店主の手であったのだろう。
そして今日もいる場所だった。全く同じ場所。全ての本棚の最後のより、一番上の棚、何処か右…

…

長い間、本当に長い間、誰かが自分を見てくれるのを待っていた。誰かが自分を探しに来るのを。自分の方に向かってくるあの女性は自分のために来たのだと望みを抱いた。
自分を下ろし、自分を見て、自分を連れて行ってくれる、彼女の家へ、もっと小さめの、もっと綺麗な、美しく色とりどりの本で一杯なより友好的な本棚。

そのようにその本も家を得るのだ。それ、一冊の孤独な本。

そして残りの同じ本たちは一体何処へ行ったのか？他の棚へ？ひょっとすると台へ？

その隣には自分と同じような本はなかった。この小さくて美しい本、百科事典のような分厚い本の間に挟まれて、最上段の棚、街一番の――それで？――書店の、最後の本棚に。あるドラマ。

起きたに違いない、多分、何かの間違いが。

それでも日々は過ぎそれに触れる手はなかった――どれ？これ！世界のどの書店の、どの棚にある他のどの本よりも触れられることを必要としていた一つの本。そんなにも孤独な一冊の本。

日々は過ぎそれに触れる手はなかった。他のどの本もそれに話しかけはしなかった。それに対して――もう一つの不思議な運のゲーム――背を向けていた！どれ？
あの背の高くて野暮ったい、百科事典のように分厚い本たち！

さて、その高いところに、世界で最期の本棚の、一番上の棚に、かつてあらゆる者とあらゆる物を憎んだ一冊の本があった…

色とりどりの本が並ぶ全ての本箱を憎んだ。それらを買う人々を憎み、その本たち自体を憎んだ。会計の店員、売り場の店員を憎んだ。背の低い禿げた店長を、棚と黒い本棚を憎んだ。自分の周りの本と、天井と大きな白い蛍光灯を…

www.b00k.gr

自分自身を憎んだ。その著者すら憎んだ。

どれ？これ！一冊の本がかつて唯一望んだのは、触れられること。ほんの単純な接触。一冊の本が勝つ唯一望んだのは、愛だった！

その高いところ、街の最期の書店の一番高い棚に、かつて世界を憎んだ一冊の本があった。

* *

日々はゆっくりと残酷に過ぎた。過ぎ行く時と憎しみによってその表紙は色を失いつつあり、ページは殆ど黄色くなっていた。
それで？いずれにせよもはや誰もそれを買わなかった。誰もそれには決して気付かなかった。不幸な一冊の本。何処かの書店の、何処かの本棚の、最上段の棚に孤独な一冊の本。　…に関する一冊の本。

何に関する？

決して学ぶことはなかった！決して知らなかった！未だかつて、しかし今の今迄、考えたことがなかった。何の本であるのか考えたことはなかった！
何の本か知らなかった！教えられなかったから　…読むことを！

その本は読むことを知らぬ一冊の本だった！

一つの喜劇。

…

その時から疑問に思い始めた。何であり得たのだろう？もしかすると何か本当に美しいもの？
まさか！人々は美しいものを買う。間違いなく失敗作の本であったろう。
見るにも、開くにも、ページを繰るにも、家に持ち帰るにも、色とりどりの金綴じの本のある小さな美しい本棚にも値しない、ある本。

そら寒いつまらない本であったろう！多分抜け毛の原因に関る何か研究だろう。
まさか！ちびで禿の店主がページを繰っただろうに！

何か退屈な数学の本？
けれど数学者はその種の本を見つける、探し当てるのである！

何であり得たのだろう？そして本自身が何であるのか知らないのに、どうやって他の者達が持ち帰ることをそんなに長い間待っていたのか？そして誰に訊いて教えてもらう？誰？誰？誰？

一冊の孤独な本、最後列の本棚の最上段、右の方。一冊の本――街で一番大きい書店、恐らくその書店中

www.b00k.gr

でたった一冊――読むことを知らなかった。

そのページに載せられた文字たち、美しい装飾文字、それらはその本に何も語らなかった。
全く何も。
文字たちは、ご存じの通り、それを読むことを知る者以外には決して話さない。
文字たちはそれほどに、しかしそれほどまでに気位が高いのだ！

* *

少なくともその書名を知っていればよかったのに。それだけ。その書名だけ！判ればよかった、せめて、抜け毛の原因についての退屈な本であると。一冊の本、せめて、数学者の収集家に向けた。何か一つ！

何も。一つのドラマ。一つも方法はなかった。助けられる者は誰もいなかった。一冊の孤独な本、ひとりぼっちの本、一軒の書店の片隅、一つの世界の片隅、一つの本の銀河で意味もなく。
文字の頂点にあって無意味な一冊の本。

またしても不幸な一冊の本だった。

もはや他の本も、台も、絶え間なく行き来する人々

も、店員も、天井も、大きな白い灯りも憎むことはなかった。誰も何も憎んではいなかった。

しかし依然として空しすぎる一冊の本だった。多分前よりももっと空しい。
街の何処かにある一つの本棚に囚われた、独りすぎる一冊の本。惑星の何処かにある一つの街で。それがどうした？

それにはもはや興味がなかった。一冊の小さな本の背表紙を通して見てきた人々のことすら。それがどうした？その隣にある本と同じようであることも出来た。その隣にあるのが百科事典のように大きくて野暮ったい本であっても。

何もかももはや意味がなかった。中身のない一冊の本だった！

多分実際に他の本たちと同じ文言が書かれていたかも。その棚に置かれたのは偶然ではなかったかも知れない。多分ここに置かれなければならなかったのかも。百科事典のような分厚い本と一緒に。
ここに！最上段の棚に！一番上の棚、右の方、最後の本棚の――それで？――街一番の書店の。
多分ここがそれの場所だったのだろう！

それがどうした？そんなにそんなに沢山そこにはなかったか？

www.b00k.gr

* *

もしページが空白であったらとても美しかっただろう、そうではないか？
それならば中身のない本がどのようであったかを実際に知っていただろう。世界の全ての図書館の、全ての書店の、全ての棚の上でたった一冊の中身のない本。

しかし中身のない本などない！中身のない本など何処にも見つからないだろう！世界中の全ての書店を探したところで！

何故？
何故生まれなければならなかった？何故？何故？
言ってくれる誰かがそこにいて欲しかった。その著者にそこにいて欲しかった。

…

果たしてそれを書いた者がいただろうか？
単なる一冊の欠陥本であったとしたら？あの機械で一つの誤りが産んだ一冊の本、あの日、記憶にある最初の日に？誤りは一つだけだったら？無意味な一冊の本？それならば？

それならばたった一つの誤りであっただろう！それがどうした？誤りはここにいること、一冊の本が世界の片隅にぼつんといることではないのか？
誤りではなかったのか?

そしてもし誰か案に基づいて書いた本であったとしたら？案に基づいてよく考えた？そう… 多分… そうかも。一番あり得る。
けれどもし気に入らなかったとしたら？もし一冊の本の中身が――信じ難いほど考察された――気に入らなかったとしたら？
もし著者には中身を気に入られた一冊の本でもその本自身からは気に入られていなかったら？その時は何？

その時は更に悪いことになる！誤りはない！永遠に自分は不運だ！著者に気に入られるために正しく書かれた一冊の本！何故？
何故自分に尋ねなかったのか？自分が全てを負うのか？自分。自分！自分、何処かのある書店で、永遠にある棚に隠れて！
自分そして自分ひとり!

…

一冊の叫ぶ本だった。
ひとりぼっちで喚く本、信じ難い程ひとり、どの客も、どの店主も、どの店員も、どの作家もいまだかつて想像し得なかった程、世界の端に至るまで。
泣き、涙を流す一冊の本！その紙のページを濡らす一冊の本。

何故ならこれ以上そのページには意味はなかったから…

www.b00k.gr

* *

何故なら決して意味はなかったから。ページも、大きな文字の書名も…

だからその本は意味が全くなかった！何故なら中身のない一冊の本、自らを全てと零に閉ざす一冊の本。
宇宙の片隅に一人ぼっちの一冊の本だった。そして不条理にも自らに宇宙を封じ込めた。

その本は書名が必要なかった。
どんな本も書名など必要がないように！

その本は著者が必要なかった。
どんな本も著者など必要ないように！

その本は何も欲しなかった!店員も台も、本棚も棚も欲せず、価値も値段もなかった。

その本は――それぞれの本のように――書名が欲しいのなら自分でつけた！中身が欲しいのなら自分で書いた！
そしてそれは子供のための一冊の本だったろう。
色と音楽の一冊の本…

…

人々は去り、そして背の低い禿げた店主は灯りを消して重い鉄の扉を施錠した。

しかしそこに、暗闇と沈黙に、沢山の本の間に孤独に、世界の最後の本棚の最後の棚の上に一冊の小さな本が途方に暮れ、ひとり他の本に向かって叫んでいた！
そしてそれらの書名を表紙から消すよう促していた。裏表紙から文章を消すように。そしてただお互いに触れ合うように。

一冊の正気を失った本、夜の湿気に濡れたような本が、震えながら他の本たちに叫んでいた。
震えながら叫んでいたが、誰にもそれが聞こえなかった…

…彼らは多分規律を乱すことを望まなかった！

しかし彼らには訊く者が誰もいなかった！
彼らは著者も店員も要らない世界の片隅にあるただの普通の本でしかなかった、購買者や持ち主すらも。

彼らには必要があったが、誰も決して彼らに尋ねなかった。
世界の何処かの棚に囚われ、何処かの本棚に積み上げられた。

そして決して彼らに尋ねなかった。
しかし彼らが代償を払う――宇宙の片隅に寂い本た

www.b00k.gr

ち…

…

そしてそれも誰も尋ねることのなかった一冊の本だった。世界のその片隅でひとり叫び、喚いていた。
一冊の滑稽な本！名前も中身もない一冊の本、他の本たちに叫び呼び寄せていた、涙がその空白のページを溶かす程に…

そしてそれもかつて他の本たちを愛した一冊の本だった。

そして奇妙なことに、どのように世界の片隅の一つの本棚のそんな小さな棚の、そんな小さな一冊の本の中にも、収まることができた一つの…

そんな幸せ！

（１２月１６日から１７日にかけての夜）

www.b00k.gr

*白*は不合理にもその中に閉じ込める

…全ての色彩を…

www.b00k.gr